

令和4年度TOKAI原子力サイエンスフォーラム

東海村の原子力「前」史

～日本初の国立結核療養所「村松晴嵐荘」を中心に～

常磐大学 砂金祐年

昭和初期までの東海村(旧村松村)

- 「東海村は原子力施設が建設されるまでは県北の畑作地帯の平均的な純農村であった」(『茨城県史＝市町村編Ⅰ』p518)
- 「阿漕浦以東では海岸より砂が吹き上げられて最上部に乗っているので砂地となっている」(『東海村誌』p12)
- 「砂山が多くて生産があがらず、入会地的性格が強かったのではないだろうか」(「東海村史編纂資料Ⅰ」piii)



『東海村の今昔』p40より

「国民病」「亡国病」としての結核

- 19世紀以後、先進国の間で結核がまん延した
 - 「わが国では明治33年(1900年)をもって結核の最初の統計調査が開始された」
 - 「そしてその被害の甚だしかったのが、当時わが国の産業の中心であった製糸業や紡績業に働く女工であった」
 - 「調査は結核の都市部にとどまらず、帰郷した女工によって農村でも拾がりを見せている実態を明らかにした」
(『結核作業療法とその時代』pp13-16)
 - 結核による死者は最も多い年で17万人以上にのぼり、国民の死亡原因第一位だった(「国民病」「亡国病」)
-

「国民病」「亡国病」としての結核

□ 民間療養所(サナトリウム)の開荘

- 1889年(明治22)年:須磨浦療養病院(兵庫県)
- 1892年(明治25)年:鎌倉病院(神奈川県)
- 1896年(明治29)年:平塚杏雲堂病院(神奈川県)
- 1899年(明治32)年:恵風園(神奈川県)
- 1900年(明治33)年:南湖園(神奈川県)
- 1910年(明治43):鈴木療養所(神奈川県)

□ 民間療養所は富裕層のための施設だった

- 湘南や須磨など別荘や保養地がある地域
 - 入院費は最低2円50銭(帝国ホテルの宿泊費は2円ほど)
-

「国民病」「亡国病」としての結核

□ 公的(市立)療養所の開所(加賀谷2003、青木2009より)

➤ 1914年(大正5)年:

「肺結核療養所の設置及国庫補助に関する法律」制定

➤ 1917年:大阪市立刀根山病院(設置命令は1915年)

➤ 1918年:神戸市立屯田療養所(設置命令は1915年)

➤ 1920年:京都市宇多野療養所(設置命令は1917年)

➤ 1920年:東京市療養所(設置命令は1915年)

➤ 1920年:横浜市療養院(設置命令は1917年)

➤ 1922年:名古屋市八事療養所(設置命令は1917年)

□ 1925(大正15)年までに17都市計1780床に過ぎなかった

村松晴嵐荘の開荘

- 1931(昭和6)年: 満州事変が勃発
 - 結核にかかって除役になった兵士が農村に戻り、農村部の結核のまん延が社会問題化
- 内務省衛生技師浜野規矩雄ら、「国家的施設としての徐役軍人のための療養施設」建設のため、日本結核予防協会、内務省、軍部、財閥などを説得
- 国立結核療養所設置には国会での予算化が必要だが、それまでの「つなぎ」として、日本結核予防協会による療養所の開設が決定される



村松晴嵐荘の開荘

- 三井報恩会：日本結核予防協会に25万円を寄付
- 国：日本結核予防協会に村松海岸の国有林を譲渡
 - 東京から鉄道で約3時間の距離であり、日照時間が長く、15万坪の用地が確保できたため」(加納1990)
 - 「茨城県衛生課長の玉木緝熙が非常に熱心に誘致された為であると浜野先生に聞かされた」(『40年の歩み』pp10-11)
 - 「勘ぐれば結核療養所建設に起こりがちな反対運動を抑えるために、会頭が旧水戸藩主である結核予防協会に運営を委託したのかもしれない」(島尾2016)
- 1935年(昭和10)年10月17日：
日本結核予防協会「結核療養所村松晴嵐荘」が開荘

村松晴嵐荘の拡張と民有地の買収

- 1937(昭和12)年の2月、国立結核療養所設置のための予算が国会を通過するメドがつく
→村松晴嵐荘の国立化が事実上決定
 - 内務省、国立化に伴う民有地買収の方針を決定
 - 内務省の浜野規矩雄と西野重孝が照沼信忠村松村村長を極秘で訪ね、民有地買収の方針を伝える
 - 「浜野先生と私が村長に計画を打明けた時、一瞬、彼の顔面筋肉が硬直したのを覚えている。そして、国の方針として決定したものなら今更し方ないが、実行となるとそう簡単には行くまいと云うのが答だった」(『40年の歩み』p13)
-

村松晴嵐荘の拡張と民有地の買収

□ 照沼信忠村長の人物

- 「地元の尊敬を集め皆からは横目様と呼ばれていた」
- 「近衛文麿首相のブレーンと云われた茨城県選出の代議士風見章氏とも親友で、時々昔話の中に出てきた」
(『40年の歩み』p13)

□ 横目(水戸藩における農村支配の役職)

- 照沼家は十か村を支配し、他の庄屋や組頭、一般農民の生活監視のほか、裁判権も持っていた
- 「村では「横目さん」といえば権威のあるもの、または恐ろしい存在としてとらえられていた」(「ふるさと歴訪」p118)

□ 伝統的権威と合法的権威の両方を有する人物だった

村松晴嵐荘の拡張と民有地の買収

- 「2週間余りも経ったある夕、平常と変らぬ温顔を綻ばせて現れた彼を見て私（西野）はほっとした」
 - 「話によると、満蒙浪人の笹目と云う人物を介して、林銃十郎総理の秘書官近藤氏と手紙を往復した。その結果近藤氏からは、充分成算ありとの返書を得た」
 - （この時点で照沼村長は民有地買収の協力を了承）
 - 「若しも、横目を親分と仰ぐ子分共がその土地を手離すことに飽くまで強く反対したら、その時は、筵旗の先頭に立つ。そして内務官僚の頭越しに直き直きに林総理と、国有林開放の交渉をする。その段取りがついたという」
（『40年の歩み』p13）
-

村松晴嵐荘の拡張と民有地の買収

□ 1937(昭和12)年5月10日未明:

- 「菅谷警察署長から地主一同に召集令が出された。そしてその所有地を国へ売り渡すよう伝えられた。全く寝耳に水であった。殆ど全村がごった返し、てんやわんやの状態となった」
 - 「横目様はどうなされるのだ、どう云うお考えなのだ。頼みとするのは村長唯一人。子分共は照沼村長を取り巻いた」
 - 「お上の方針だと云うから、**今更しようあんまい**」
 - 「そう云って眼をつぶり腕を拱く彼横目の本心を見通し得たものはその時1人もいなかったのだ」(『40年の歩み』p14)
-

村松晴嵐荘の拡張と民有地の買収

- 「一同は止むなく買収に応ずることとなって大勢は決した。価格の取り決めも難行はしたがそれは只技術的な仕事である」
 - 「深更に及んで漸く全員との調印が終わった」
 - 「それにしても、村長照沼信忠氏の郷土に根を張ったあの隠然たる力と、苦悩を乗り越えて示された決断とがなかったら、事態はもっと紛糾していたであろうことは想像に難くない。（『40年の歩み』p14）

 - 村長の一言により反対もなく「1日」で用地買収が終了
-

村松晴嵐荘の拡張と民有地の買収

- 1937(昭和12)年6月「**国立療養所官制**」制定
(国立結核療養所設置の根拠となる法律)
 - 日本結核予防協会は晴嵐荘の施設一切を国に寄附
 - 1937(昭和12)年6月23日:
全国初の**国立結核療養所「村松晴嵐荘」開荘**
 - 当時は除役軍人(下士官以下)専用の施設
 - 敷地面積:12万0167坪(東京ドーム8個分)
 - 患者収用定員:1000床 ※*全国の公立療養所は1780床*
 - 民有地買収による施設の拡充により、当時の日本の
最先端・最大の結核療養所が村松村に誕生した
-

村松晴嵐荘が村にもたらした変化

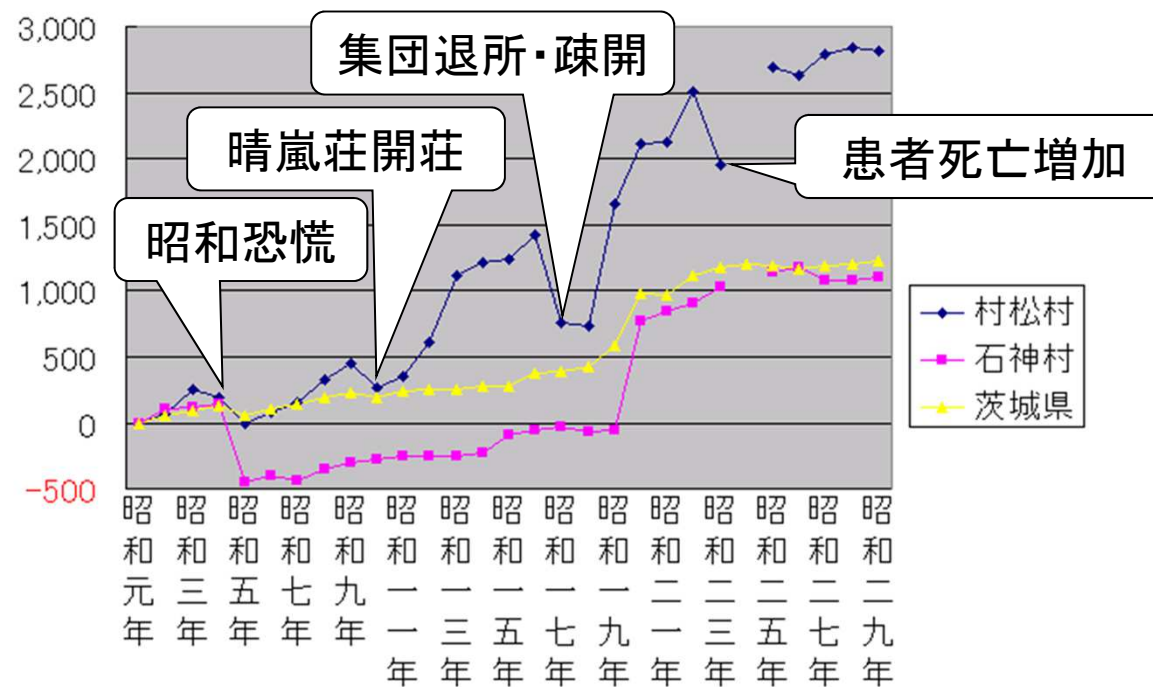
- 「当時は結核についての一般の理解はいまだ不十分で、多くの村民にとっては結核療養所はいわば招かれざる客であった」
 - 「先祖からの土地を一片の命令で強制的に買収されることには地元村民の強い不満があり、関係者の苦悩もしたがって大きなものがあつた」(『東海村史』p613)
 - 「当時結核は一般に肺病と言われ、肺病マキという言葉もあって、結婚にも差しかえる一種の遺伝病のように考えられていたから結核療養所はひどく嫌われていた」(『40年の歩み』p8)
-

村松晴嵐荘が村にもたらした変化

- 無医村の解消:「村松村は無医村であったが、療養所開荘後は村民の医療をする約束があった」(『40年の歩み』p64)
 - 就職の斡旋:「その当時に晴嵐荘から朗報があった。それは土地買収をされたお方に優先的に、就職とのお話で、早速兄は炊事助手職員として働く様になった。その後は私が同じ職場に就いたのである」(照沼、砂金 2017)
 - 商業の発展:「晴嵐荘が出来てから村松村にも呑み屋が出来、村の様子が変わった」(『40年の歩み』p9)
 - 人口の増加:「晴嵐荘部落は、現在1147人の人口と75戸の世帯数を有し、世帯数では本村で第4位、人口では1位にある」(『東海村誌』pp29-30)
-

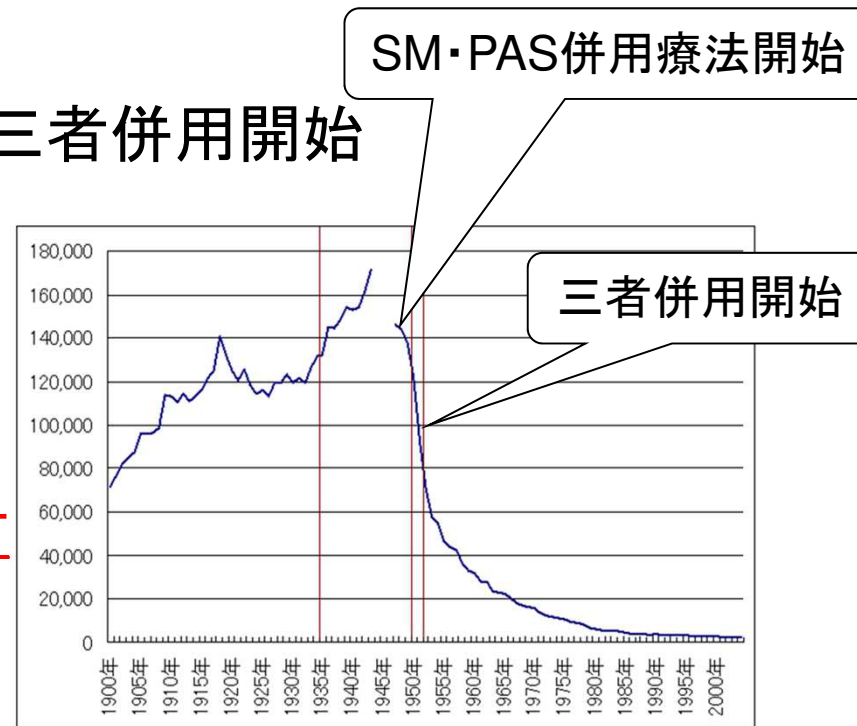
村松晴嵐荘が村にもたらした変化

- 昭和元年～30年までの人口推移
(昭和元年を0とした増減数。茨城県は100倍)



結核の化学療法の普及が村松晴嵐荘と東海村に与えた影響

- 1950(昭和25)年10月:
 - ストレプトマイシン(SM)・パス(PAS)併用療法開始
- 1952(昭和27)年6月:
 - ヒドラジッド(INH)製造認可。三者併用開始
- 「戦後の日本に(化学療法が)導入されるに至って、従来の結核治療の様子は一変する」(『結核作業療法とその時代』pp147-151)
- 結核が「治る病気」になり患者が減少(このままでは元の寒村に逆戻りしてしまう)



結核による死者数(1900～2000)

結核の化学療法の普及が村松晴嵐荘と東海村に与えた影響

- 1955(昭和30)年、村松・石神両村が合併し東海村誕生
- 東海村(旧村松村・旧石神村)の人口増減

	出生	死亡	自然増減	転入	転出	社会増減	人口増減
昭和27年度	155	122	33	594	731	-137	-104
昭和28年度	156	103	53	645	682	-37	16
昭和29年度	235	97	138	648	670	-22	116
昭和30年度	189	91	98	631	670	-39	59
昭和31年度	117	57	60	335	401	-66	-6

- 社会的増減(転入・転出)は一貫して転出が超過
- 「晴嵐荘地区では約400人へったが、これは国立結核療養所村松晴嵐荘の入院患者の減少という特殊な事情によるものである」(『茨城県史＝市町村編 I 』p528)

原子力研究所誘致の経緯

- 1954年(昭和29)年:
 - 国会において2億5000万円の原子力関係予算が可決
- 1955年(昭和30)年11月30日:
 - 「財団法人原子力研究所(原研)」発足
- 1955年(昭和30年)12月:
 - いわゆる「原子力三法」成立(翌年施行)
 - 原研が原研施設の選定開始



原子力研究所誘致の経緯

- 1956(昭和31)年1月下旬時点の有力候補地
 - 千葉県習志野旧練兵場
 - 群馬県高崎市外白衣観音山一帯
 - 群馬県岩鼻旧陸軍火薬廠
 - 埼玉県川越市郊外高萩付近(民有地)
 - 神奈川県横須賀市武山旧海兵団跡(米軍使用中)
 - 茨城県水戸市郊外米空軍爆撃演習場(米軍使用中)
 - 現在の原研の地域は当初候補地ではなかった
-

原子力研究所誘致の経緯

- 1956(昭和31)年1月17日:
- 米軍水戸射爆場が候補地になっていることを新聞報道で知った初代村長川崎義彦が、「返還問題もあり、射爆場は無理」と判断。その北の村松海岸の国有林を候補地にと県に働き掛ける(『毎日新聞(茨城版)』1997年7月8日)
- 「すべては、初代東海村村長、川崎義彦氏の“ひらめき”から始まった」
(茨城新聞社編2003 : pp62-63)
- 川崎義彦(初代東海村村長)
 - 代々「組頭」として農村を統治した家柄
 - 明治以後も一族から村長や村会議員を輩出



原子力研究所誘致の経緯

□ 1956(昭和31)年2月1日:

- 選定委員会による射爆場視察の際に「水戸第2地区」
として村松海岸を急きょ視察コースに加えた
- 約350ヘクタールのクロマツ林は、水の便も良く、委員は
「理想的」と評価。有力候補地として浮上
- 「当時の毎日新聞は、「(東海村案は)選定委員会が現地
を視察した時に“こつ然”と現れた」と表現している」
(『毎日新聞(茨城版)』1997年7月8日)

原子力研究所誘致の経緯

□ 1956(昭和31)年2月15日:

- 原子力委員会、原研の立地場所を横須賀市武山に決定
 - 高崎市は中曾根康弘代議士(自民党)の地盤
 - 横須賀市は志村茂治代議士(社会党)の地盤
 - ふたりは原子力の平和利用を提唱した超党派グループの中心メンバー
 - 「原研や原子力委員会も、その意向は簡単には退けられない事情があった」(茨城新聞社編2003:p65)
-

原子力研究所誘致の経緯

□ 1956(昭和31)年3月17日:

➤ 政府、武山案の再検討を指示、政治問題化

①「武山は自衛隊の訓練地として返還を要求している」

②「米軍からの返還の見込みがない」

➤「自由民主党中曽根の地盤高崎と社会党志村の地盤横須賀・武山、この二つの候補のうち武山が選定されたというのは与党自由民主党としては納得がいかなかったという政治的闘争の意味もあったようである」

(『日本人の安全観』p102)

➤「国務大臣で初代原子力委員長正力松太郎が東海村案にこだわった」という証言あり(朝日新聞社取材班編2014、p54)

原子力研究所誘致の経緯

□ 1956年(昭和31)年4月6日:

- 政府、武山案を不適當として原子力委に差し戻し
 - 同日、原子力委は再検討の結果、茨城県東海村を候補地に選定(『東海村史』p805)
 - 「原子力産業会議副会長森一久は『東海村の敷地が広大であったというのが、一番の理由でしょうが、けんか両成敗という面もありました』と茨城新聞のインタビューの中で語っている」
 - 「すなわち、政治的鬭争の落としどころとして、「水戸郊外」村松地区が選定されたのである」(『日本人の安全観』p102)
-

原子力研究所誘致の経緯

- 茨城大学による世論調査：1956（昭和31）年8月
 - 「原子力研究所ができることになって喜んでいますか」
 - 喜んでいる：41.0%
 - 中間的態度：25.1%
 - 喜んでいない：19.3%
 - 喜んでいる理由
 - 交通の便がよくなる
 - 日本の原子力センターになることは村の名誉
 - 村の次男、三男にとっては、就職問題が明るくなる
 - 村が繁栄する（東海村教育委員会編 1958：p206）
-

原子力研究所誘致の経緯

□ 「村松晴嵐荘」誘致と「原子力研究所」誘致の比較

	村松晴嵐荘	原子力研究所
誘致の背景	産業のない寒村	晴嵐荘の患者減少
誘致した施設	日本初の 国立結核療養所	日本初の 原子力研究施設
中心人物	照沼信忠	川崎義彦
・伝統的権威	横目	組頭
・合法的権威	村長	村長
反対運動	なし	ほとんどなし
用地買収など	一日で終了	短期間で終了

原子力研究所誘致の経緯

□ 東海村が原子力研究所を誘致した要因

- 村松村の「主要産業」だった村松晴嵐荘の患者が減少し、東海村の転換が求められていた
- 同じ時期に国が原子力施設の候補地の選定始めた
- 伝統的権威と合法的権威を持つ川崎義彦村長の「ひらめき」と県への働きかけ、村民の説得があった
- その背景には、かつて日本初の国立結核療養所村松晴嵐荘を誘致し村松村に繁栄をもたらした経験があった

□ その意味において、村松晴嵐荘受け入れの経験は、東海村の原子力の原点のひとつとなった

ご清聴ありがとうございました

□ 引用文献

- 青木純一「結核療養所反対運動と住民意識—大正・昭和前期における公立療養所建設反対運動を比較して—」『専修大学社会科学年報』第43号、2009年
 - 朝日新聞社取材班編『それでも日本人は原発を選んだ 東海村と原子力ムラの半世紀』2014年
 - 砂金祐年「茨城県村松村における結核療養所の受容と地域振興～「原子力の村」東海村の原点～」『コミュニティ振興研究』第13号、2011年
 - 茨城県史編さん総合部会編『茨城県史＝市町村編Ⅰ』1972年
 - 茨城新聞社編集局編『原子力村 シリーズ臨界事故の村から④』那珂書房、2003年
 - 加賀谷一『結核作業療法とその時代 甦る作業療法の原点』協同医書出版社、2003年
 - 加納保之「国立療養所村松晴嵐荘覚え書き」『溯源東海』4号、1990年
 - 国立療養所村松晴嵐荘『村松晴嵐荘 40年の歩み』1976年
 - 佐久間好雄「『御横目付』について」東海村教育員会編『ふるさと歴訪』2009年。
 - 島尾忠男「元村松晴嵐荘病院、現茨城東病院」『複十字』369号、2016年
 - 照沼勝夫、砂金祐年「村松晴嵐荘の思い出—村松晴嵐荘元職員の回顧録—」『コミュニティ振興研究』23号、2016年
 - 東海村教育委員会編『東海村誌』1958年
 - 東海村史編さん委員会編『東海村史 通史編』1992年
 - 東海村史編さん委員会編『東海村史編纂資料集Ⅰ 村松村郷土誌・石神村是調査表』1988年
 - 東洋大学編『日本人の安全観』東洋大学、2005年
 - 『毎日新聞(茨城版)』1997年7月8日
-